

瓦人之古文

二

231
69
5



百人一首 古説巻之二



參議堂

「丁度八十歳、かくてらよゆの、人よりよゆ士の酒瓶  
古今集四聲旅、源氏の酒よゆ、うけたる時あよひ  
アモルムツモ、ああう人のりとよつハーリ  
しあよゆく、くせく、川とよ、あら旅歴のけくあの、  
コトるより必けはよ、かわもとく、そりそ寧子府より  
一法のゆうれん直よを寧子府も、流さぬと、さふ人へ  
けくえりれ、も、一夜漂廻せし、義和四年七月、け流素  
の初八月、年十二月、おれん其間、あくやされて、絶命り  
て、あうちかくおぞきも、うり  
とも人臣實海のを、  
又後日、すほれ、い、  
の漂廻、最初に、  
七月、流罪の初八月、  
ナリタ、

今昔お法の田平は今小野篁とよ人を  
う事あらか隱沒のあらは流り附船  
めぐれままであるがる人のれく  
うては、ハリ

千多のじく八十島からて

とよして明石とよほりてちこれ旅  
波を船かして明石のとまつしろよ  
ねくざくもあす人との若流人があと  
ゆりぬとやかてひはに史とよもぬあ  
れは是もかてゆふとよあようゆいむ

らしきとよどれとよ若流よされば尚  
くのよそゆ人の洋はせりや  
せきよすすみれんのあらがよの洋の島  
瀬の島ともいはとがりて只今旅波津と  
さぬるとよみくへよおととまとで  
送れる人よつてゆふとよの様波ふ  
其場とよれきて船をよとよりや  
よわれと流人の船をよりや  
こよのくのよのよのよ

賀根云萬葉集考に有  
原一瀬伊雲旗雲伊雲  
祐之全夜月被今明ク  
ソサハヤリモトヨリ  
タモトモトモトモトモト

の事にて是へたる方を祭近古或のをちと要  
もくもくもくも信達めと酒呑め字と申るを  
えと海ごととよもと祭さととら起れ  
ていうふとまれハヨヒ紀のゆ波よもじ  
はあらうとひ海よりとつう御のせい  
よ小坊ありたまりおのつゝゝ細す  
ちのれよつんとふておとより  
海ハ船にてひきるをよことと  
名と負るうゝ。神代紀よ物の後  
島あり万葉よほの海ナキ中  
アリとぎく又渡ばぬ方波海波の羊と

改日本紀本紀萬葉集考に綿の  
字原一瀬伊雲旗雲伊雲  
祐之全夜月被今明ク  
ソサハヤリモトヨリ  
タモトモトモトモトモトモト

書くふし照一ノ子ノヘ

後のま可  
ムトハリ

○又和多よみよし、ハたのやくあのか  
詔みくワツテとよ時、あのか神  
れ名、又名神のよりわなようとつとて  
勿論よそつと即海神 その謂い古事

記云生海神名大綿津見神次生水戸神  
名速秋津日子神次妹速秋津比賣ニ神因

云此速秋津日子速秋津比賣ニ神因  
河海特別而生神々次生山神名大山

津見神次生野神名麻麻屋野比賣神

亦謂野祖神云此大山津見神野祖神

ニ神因山野特別而生神云々

海の神對也云々と約て云々つともの

神と云詣アマツシテと約て云々つと

云々りうのえとされくまう 持と、  
はやまうとすもとよ内 神と

ぬづらとふのつむらのりと略せきゆうさを  
げつらん語うれいれのれのまと儀でちくめの事  
らえ枝ちり郎でのまちう

冠辭

解 ひきやく

異 ひがい

改葉本草集解卷(ほりこく)  
牛馬等のうちの多くと云ふ小  
牛馬等のうちの多くと云ふ小  
又名所牛馬等の名前を云ふ  
牛馬等の名前を云ふ

コ八十歳に満上より多く爲あれひいてけ  
此處名の傳承をとくあれもかく大抵又  
いつう多くもなり  
つかりてひあくへ持とばんどう彼家あけ  
云々ととよけのや一个眼前しき高くも  
よもうてよよいあくと傳承までとやけて  
おひくとすも集卷牙すよ 天平七年八月  
作

如眉雲居所見阿波の山懸而榜舟治不知  
毛古の手からての洞のいわくとあとうけ

左より外あり  
この人のへりへりくらべて一一小町の花色  
色などいへるの類う

改子藏集卷七曾告之傳  
内事の傳あらそんゆもちかふ  
りくわらひやうわすり葉落  
大傳正の事那うあらそんゆ  
あらそんゆあらそんゆ  
あらそんゆあらそんゆ

この人の約あといまへ言廢せてリとくとのあ  
辺よりのよどくへよのへこ伊せね況よ  
大邊のよどくへ齊業平あわせはれよどくへいひ

うちや死方やつこと持つて我よ教よ塗の約あ  
けあら今くへと甲ゆくろあらそんゆとく万承  
集卷七曾告之

應清沉有玉手欲見千遍曾告之潛為白水  
或說又初勘の笠がれり人うへて生を傳へ  
放くてけうあよどりからくろことよりあ  
まわらう笠がけ時後五位下刑部大輔形ト人  
えて四位の義の名もけうへ説名ととくす  
を手の後まことにと傳こうやうさうへふへを  
えよどりかくあよどりひきか又へばよめ  
じきくよほに被はまてまつて傳達と  
りうんも多かりてうぢよ京多人ま  
つうすともとんじや又爲くをとけむ

摺よソラ。泣も涙ちよ。あよのうてもくろとて  
ちよとつとれそつ。さうへとくゑを集シテ。  
ひやかひ教シテうるシテ。とけくシテ。とて。従  
入スみシ。とシ。といとく。かふねとせんと人  
とあ。こしくほ。多く。なよ。かくシテ  
て。わく。ほ。ほ。う。よ。う。へ。一。万。え。集。卷。二  
十。も。持。く。訪。人の。う。代。せ。る。も。可。よ。

ふ。え。波。お。尔。私。平。宇。氣。復。惠。各。安。佐。早。良。  
は。和。我。己。燕。泥。奴。等。伊。弊。尔。都。氣。之。曾。三。耳。  
も。て。う。く。る。ま。ご。よ。り。の。旅。波。よ。から。船。

も。ち。り。あ。す。れ。う。と。流。人。の。も。り。ひ。や。う。ト。

### 譜

改古文書小遠祖キ柳平と曰  
天神帝子命ナリ出事

小野胡臣の姓氏の前より文德実禄云仁壽二年十一月  
參議左大弁從三位小野胡臣是薨參議正四位下卒  
守長子也。承和元年為聘唐副使明年春授從五位  
上。ニ。五年春聘唐使等四舶次方泛海。案傳日が  
ロ位下也。又ニ及納の漂泊ハ承和四年  
七月而被定。其流ハ同年十一月也。而大使參議從四位  
上。若原常嗣嗣駕。一舶水次穿缺。有詔  
以副使才二舶改為大使才一舶。曾也抗論曰胡

議不定再三其事又初定船次才日抵京家者為才一  
舶分配之後再徑漂迴今一朝改易配當危器以己福  
利代他害損論之从情是為送施既無面目何以率下  
皇家貧親无自又枉療皇汲水採薪當致匹夫之辱  
耳孰論確乎不復駕那チ六年春三月遂以持詔除為  
庶人配流隱沒國在路賦謫行吟七十韻エシこれよ  
しき續日本後紀云承和五年エシ遂懷幽憤作西  
道謡以刺遣唐之役也其詞率與多犯忌諱嵯峨天皇  
覽之大怒令論其罪故有此靈謫シラ

○續日本後紀又云承和七年二月云召流人小野篁同

七月小野篁入京被黃衣以祥謝之シヨウセキ年閏七月  
叙本位て又漸昇ツクニムして同十四年三月云從四位  
下小野篁為參議ソノヘイ文德實源モノダクシマツル二年冬十月  
就家授從三位ミツミ

僧正遍招

てはれをのゆひ波波ハハからよとしのるありとせそ  
古今集新工部郎の章班シヤウバンとそそとトソソト良  
岑家貞カネヤマタケルとらうわ節ハセツ新嘗會の時あつたか家  
及人アヒトとねとへた太オ傍ヨリ遍招シラとちうを  
極官キョクカンと奉スル例ヨリうひてとよのくとよのくの人

乃ちうる年迎五年前とく入滅の後  
號も家貞とされへる時とおのれとて家  
さんをととのひよ古今集りぐる  
りのう

立節は毎年十一月中の丑の日より己酉の  
間が立節の日麻姫は良家女といひ嫁せ  
ぬと撫みたり其用ひの國刀を立てぬてひ又公々  
子すすめり去次第の法は六歳みくら  
年多きれりとくまつたつ辰の日麻姫  
の正日にて夜と墨の節令とよけ麻の示  
府まとともととととえさしもとじふ

ノんしけ悲しき事あり海あまに外  
のうれいん夢け天よひとれども死する  
をよ寄せ地のゆゑもそくとく天と女  
の弟とくわづくうて妻弟のとくと天と  
すの天よりんこれあうすとくううう  
それとくへまきぬを天はれの吹とくと  
さらかくもえひやうてあんもうも  
とくとくとくとくとくとくとくとくと  
とりくとくとくとくとくとくとくとくとく

の天つのつゆ静て雲れぬるといひ天海と

いとんかくもひよりて襄教ども

ゆゑよ没てつゝ

こととあはゞ女こむよ万葉集よお通女初女うそよ  
うさくこよいれそぞりて天ほか女のゆよ  
アソトとあそんとあすりよとあよあれ  
どそのとくとく小女處すあとちきよひとと  
きぬせあく又、こよと云ひ活まうこの仕事に付す  
こ五節の文子ハ左行修晋平侯ニ醫和曰節之先生之  
不可ム以節百事也。右有五節。注云五聲之節也一への事よめひの元  
ちかよくらこそ是教より一承の名と號す後日を紀本す

五年五月癸卯宴群臣於内裏皇太子親舞五節。之謂曰  
天皇大命尔坐而奏賜此掛支異支御原宮尔大  
八洲所知志聖乃天皇命天下チ治賜此平賜此所思  
坐シ上下チ齊ハ和ア無勤静ル令有波尔禮等樂  
二都並立平久長久可有等隨神ノ所思坐立此乃舞  
手始賜此造賜此行車物等之皇太子斯王尔字志之  
絶爾受賜波行車物等之皇太子斯王尔字志之  
是正史ノ始てスくレけ附マいト云定タくレ  
之ノばくよナ月トかねりうきて去リとレ淨  
見原文モうち起ルる事シし大シよみシされ

改ニ善清行の足見御子ノハ  
天武帝ノ御子也小字ノハ  
天武帝ノ御子也小字ノハ  
天武帝ノ御子也小字ノハ

萬葉文粹 善相公  
封事

老淨陽京天皇を御宮にて坐とひをまよ  
天女くらむことと女ともと女ともすもか  
引と被よぬ。しとと女さひともとくらひて  
みな神とゆふ人一个あるもう是くらとい  
へる。かづつねり。此後にちに矣。すが給文粹  
よもんくらきとも附云の説多々へいよと  
うれのうれり。もとと韓紅韓錦の如  
く黒國もう海をもとと称せらうと天女は  
もくのまとあよまんす。おほづらうもさ  
天女の日中の潤えて和おどり。海せる。りぐ

老の後よ好むのり。ひうそる。漫云。故不供  
鳥の旨。天下と。はり。もんは。礼樂より。と  
はて。聖智。もう。から。ひよ。うと。あ。ぬ。り。う  
ひがて。聖酒。とかく。まつ。り。の。え。万  
葉集卷五神龜五年山上臣憶良長天皇

遠等咩良何遠等咩伍備周等可羅多麻乎多母等  
尔麻下志。う。麻周羅遠乃遠刀古佐備周等都流伎  
多智許志。尔刀利波。松云云。——  
とみれの。うち。の。す。淨。ん。ふ。の。あ。時。く。う。あ  
う。け。樂。送。を。ま。は。月。く。出。て。樂。府

うそぞろひかへてはのつひ

譜始

その娘ハ良岑胡氏宗貞ヤウ良岑胡氏新從姓氏錄云後四位下良岑胡氏安世是桓武天皇御子之延暦二年十二月特賜姓云宗貞ノハ右の安世々の男カラ後日本後紀云承和十二年正月左力位下左兵衛佐十三年正月為備前从軍左近衛少將嘉祥三年正月從位上此前年渤海國の侵襲方舟使上げ

きされトハ容徧アリ人トスコトガ

サ将良岑胡臣宗貞出家為僧先皇明寵臣也先皇崩

仁

後哀慕無已自帰俗理以求報恩時人愍焉古今集よ

もえの山よのづてひらむかうてえと三代

寛裕元慶三年十月為權僧正仁和元年九月為

僧正とも

杖桑畧記云寛平二年二月二十日

丁未左大臣融<sup>ム</sup>奏曰花山元慶僧正昨夜入滅<sup>ム</sup>

此外被恥革賜封戸賜賀

等の史及諸記によく

陽成院

はくくのすら高き山の川をはりて  
後撫集を三ばらのみこよげりく

改  
内藤虎光志野新原所  
義理とおもふ事のと  
事せよすの事のと  
事のと

泊のみこりりむ紀畧云延長二年四月一日入  
通三品縁子内親王薨元孝才ニ女セ是泊のみこ  
とくら泊多院え考の泊示のあそてあ條小  
東洞院東お縁子内親王あよわせ

のみことせうりけいりのゆるのりきくは  
を越冬の泊地とふねくじく

のくわくわくよかく

の花波ねのとくら高き山の川をはりて  
ハミの川よかくま川とくらがくく  
切よせまとく

川花波山の川よかく高き山の川よかく根と  
川の川よかく根と

山の花波山の川よかく高き山の川よかく根と  
川の川よかく根と

ありて孔子の家流は謫禍の流をとどり立てば  
くろんひきさんとてとどるるにぞぞくへといま  
万葉集卷古事記うとるよ

近波神の伊波も等柳也於古流羨豆代爾毛  
多田良爾我家於毛波久久爾又長弓又一並乃  
荒波山又い女神男神とてニ名ありうてこそ  
つまに二種のカヒラ水の底にやたの所  
ユクムヌカヌソツ砂の下て水の折量の  
シモモトモトモトモトモトモトモトモトモト  
ノヤフサレシモトモトモトモトモトモトモトモト

ハちうら川とさうのれい謫禍の流よりうづけ  
アオニタハキモトウタケ、ねじンヒカサナヘ

ミ

諸

皇考清和天皇皇妣ニ佛后

高

天皇

御諱

三代實源云元慶元年正月即位同八年二月讓位九

曆云天慶三年九月二十九日陽成上皇后

春秋八岁

位ひうそせみひてニ佛院或陽成院又右も  
ノギノ有孔神ノ如トテナス從ハ陽成也

上て是陽成院上皇陽成帝陽成院元々より左  
記一回よろしくれと多く今のかく陽成院と  
いづりアセリよかし清溢と某院とア  
ドリナシニ代冷泉院も此下にけふも  
陽成天皇とぞへまゆおうと例のなれどとのこ  
ころ人のふるう

河原左大臣

みぢれくのあめりとむ近習アマミツを

左京集第四  
歌一

第四句左京集よりみたりれとおふとあ  
今みづれきんすとれ伊勢ぬ次とらゆて  
後人晴記のうひよる伊勢ぬ次とらゆての詞  
とく詞とせりゆれとわのくとくうつて  
無とくあらわとがよそのくわくとわくと  
ちうとくくとく、ハナモウ

これハ虚説のゆれとことて言ふ  
の、くちよとよあると左京集  
はもとシホと解へ或初々やうのくよ  
あらううよつきを主家

改  
難更ふとソリの御言句  
あらもすくはくべし  
かわうハ物と傳のを  
あひてもよしゆゑをす  
基ようれとすとまく  
きすと小石をさう  
くまとまく集  
意の細心をの  
包わうるれ玉流  
名とシカツの御  
主と多くし勢  
いと多くとまの取と  
ハ相うるも大それ

口ひのよとソリハやうの湯もひやまうあれ  
くほの人のよとソリ我伊摩の汽海を者たり  
そく一上々へ度してく所一そのへりの後  
のきとしちせうあよおひみとんと望  
えんとあととあそきこゆをよとそりと  
えうみゆくとくあよきゆくとゆのみく  
とよすよハ街よとむとよ、  
このくよと上のねりと所と下のね  
ぬの一言と巡るきう又トのふいを入ておとく  
辞とてよへつるありてかとほよあと  
けほとてハ世人をよしわんをめりよ

れよりのよとふをだらん古流よへ延言  
約云清濁通例等教多の行為はせ古流と  
く解らるる所ありけ何故もなううすよ  
者流ハ立音通韻のとひづ。そのとひづハ古流  
ゆうりと万葉卷七寄玉

水底ふ沈白玉誰故心モ而吾不念尔。これらの  
流例多。又云れをめりとよとてり長くの  
。陰奥のふよけ發句ハ冠辞うけあよあよ  
よ歌りれ。よよとよよ沈よ冠らせうたが  
国名地名を以て冠辞とする者すまくと

其一ニといふ方を集卷分四よ石上零十方  
西尔将國哉 古今集も

カラマヤ

はのあらぬよりりす山城のとひをむすと  
えらそそがうそ一歩と隊奥の信丈取よ  
足摺布と洞セシメとソハ豆子のシトヨリ  
ぬ人の附合せし傳すシヒツハ布とりそ  
行のをもすれと摺布貢セ一事のねるも  
摺をあそそごしるゆすちも  
アラヨクアラヒテキヌトモウツヘモ

春日歌ニシテ紫のどう衣をすのまれとみゆ  
るともあすへて必ずめらのくらうわ  
しきいよと解スムソハアハの下ニシテ  
えぬものもあきてシテアハ多  
ういのやうとひきとくを幻  
あすめうとうとくと瓦りとく衣あやせと  
必黄ち藍垣衣月草芽子等と何とあくと  
を行ふやうとけんじうのねよるの  
うちと歌わきていろともくと  
紡布於とリテのよのととくと  
摺りの其色甚か紡ふはれと

とくとくとてのとうとよやとせり  
ひまかへしに忠寄集まへまくらる人よ  
白まゆとまゆぬしてとうてちうらとく  
猪

うちんでひきを御者のあすくはだ  
れまのまのとうらもまくらねりけまりえ  
おてしもあらきてよながく  
トあらわとえトと又延長式と稱れ  
小松とう小まとうおとつもりう又後  
機集はまのやうかとよきと一を

きふとうもきげあひま山<sup>ま</sup>かわ義敷  
えふとまきのやうらとうる  
も負れいわのやうくもちても名を云  
さうべーとさひやうぬきういかのも自  
野のすもしりうきと色ととよまの  
やうととくらめびく

つあぶまひわおおきのひよ姫衣一名鳥並  
之の布といづちひ水衣もソハレハラコと  
エリカとてさる文多うとくへの氏

文集麗山高ノ吟よ牆有衣う麓有ねう

此れも又 うひるをすうり又个の信のつるま山  
中よりあらはす御言くらあまおわのい  
れとよせりつとくふうとうひるれひ  
うひるをすうアスケルべーへ取よの信の  
よまのせりとれりへて別わざち  
きるをすうきの必とわるおうとよ生く  
きら きら きら きら きら がん 又 萱まと  
大和や萬 るゐとも こよ和ちよと臺よへまひ入  
れますまよまよまの花はるくと きら きら きら  
まよ花のひるたそとそと きく きく きく きく きく  
まきまきまきまきまきまきまきまきま  
てそくそくそくそくそくそくそくそく  
日わの光とそくそく

つりひとうりえをみゆきとよ 泪ありぬれ  
まよ山あかなそそうりとく あま水  
テモぬ 换衣すよもひあとひとろよく  
ももそそりへとうりするわのうきもめ  
うてりうれむとくあらなよふがま下  
そてのそちよみづくとくふくとしおよもて  
そくそくのくみづくとくふくとしおよもて  
まよじくのほりとく

譜

差滅天皇之皇子お大原氏義和五年十一月

源朝は融於内裏冠馬天皇抽葉叙正四位  
下嵯峨太上天皇才八子大原氏所産也賜之  
天皇今爲子故有此叙同十五年右近衛中將  
義佑守嘉祥三年從三位以上續日  
七ナ三代实本後記貞觀十四年左大臣寛平て年薨  
四年左大臣寛平て年薨七ナ三代实  
録及桑畧記等贈成天皇  
のひよニ源氏とすハ弘仁五年五月勅り  
て信弘常明眞姫栗姬全姫若姫此男女  
二人は始てタテされもう少くのひよし  
け氏とすア融ヒヨ才八子とゆる男ふふ  
才ハのあざり

光孝天皇

考る者云々あてひみつむ我衣ひよきひや  
古今集考ニ仁和の帝みこよかく  
すりはけよ人よ若菜うひる清  
け湯可すをせきよ財の親王よませとも後より  
天皇と称せえり後とぞよ先くして  
おさひりよかくさうさきに北陸すえん  
人り又この時よりてえほへ内集室  
およに和の帝みこよかくすりる時清

とはのほのまよとちるよ 17  
身辰のみせれとはのまよと大みよて／＼  
よとせるともとあとのねよいさきうりと  
くらもしも／＼おとづく／＼とて／＼  
とひにまよてもくされよ／＼てもくさす  
まひづく／＼のゆゑよ／＼とくら  
かくらむと身辰祝主のとよあよちぶを  
あよよな／＼としがれ若葉と早葉と人  
峰とくら／＼とくらとくらと古下ト  
つあ／＼のくら／＼とくらとくらとくら

けよらとよま／＼せんとくよせよ  
おとほう時神よきのからば／＼くろふ  
くよみ／＼竹ととその節のねとその  
まよのくよみ常祝主のくら／＼とくら  
とくらとくらとくらとくらとくらと  
くらとくらとくらとくらとくらとくら

○或説よそへ有るとあるととへとく  
人をもあとへのよど／＼と二へら  
ト方民までよかと忠と義とゆすふと  
よかずのゆくよしよしよしよしよしよ

着しゆくゆきとてすよもとよひいよひ  
れらうしゆらんともさらひとおとよわのや  
さーさうそ人よこよよりのくアキモキモエ  
てを左太に獨活そとくとてあととをせぬ  
い物まよは宣の定名書か納とくとてゑ  
とうじきがひ奉といとまぬよすくそれ  
ゆきよりくふくうてあと渡せきのね  
すす説よ望のつぶことよ古人の機局のえ  
ゆあは法師の毛目のよつゝ歌は  
つ万代どどよまればくらうるむと

春の詠入らば此説六八の篇次よ  
ゆきはよもよきよもよきよもよきよもよきよもよき  
のが一まへとむちかきよみゆゆゆゆゆゆゆゆ  
よ伝考葉上み日切初察并内経日うち前月上の年  
とすむる寛よ年中うちゆきよけ説いうがう  
文活穴通てあえ年西月云ち曲寫強之者不遇公に近  
侍教十人者ハ上月の中必有此す附渭之子日盡也  
今日之要修旧迹でこれよい葉奏といふされど  
左朝文粹よ苦管賛大相國寛よの附付上月子日宮入  
よ賜菜奏宴てふ又あらんと参考どる既す

よもろ何んとも算うと用ひかへしかねのす  
完まし後天唐康保のさてもと上のゆ日又うみのす後う前  
聖歳時記より月ちる俗以て種菜作奏食之無万病とす。うちねせ  
入りてるよは定まらむ。下記を考て切合

○又詩文墨説より遍昭傍而よ宣と詠ひる時の事  
うとんアモ望ハ即位二年エリテラ此リ。おれ親王  
の御代にてソラモモ春の御代てとあことや  
口或ゆえ祝との所と。しきつゝ。おまえま  
父の主うとよい前よソラ妙御衣りと。そ  
がくくはるどひの。さうう是又ゆとふゆる  
主ねヘトみづくよ尚かつてちづれぐりのりの祝

歌と詠ひいそん後世とこのひりの今  
下勺ひゆき辛うきといとをよ。の祝切

けもくよ。こ万葉集卷四高安王襄翁

賛イラシニ歌

奥幣アキヘヨキヘニヨキイニヤイセカタメワカナトルモラシフカ子

二十天平元年班田之時使葛城王從山背國贈薩

妙觀金婦等所哥一首副ルヤリ芥子裏

安可称佐須比流波多、婢豆奴波多麻の欲流

の伊カ來仁都賣流芥子許礼まこと核証

夜歌 我弱肩ヨハガタニトタスキトリカノ  
太手次取拭トリカノとよおれし辛房

とひくはしりいののかひひきよ  
和わぬよア冬の家夏さち女のかばと  
セセラう

君、為衣のことをゆれば去のやふては  
るつねに化すとせと沙るものとし  
ひとてちきよるるともととく  
是のものとよくは世接民の  
うちひこさんととおとと人とうにせ  
あもー珍よもゆくはと一日万歩の夜  
向へていいとくまれなる事あまけゆ

ユカミークハ民々きーりうかのう  
てまほうづくまのめり嘗べうて難  
歎して泣きりんれひうくー

### 詠

皇考仁政天皇と妣贈皇太后吉原氏次子贈大政  
天皇御譲義和十二年二月元服日十三年二月四品  
されうちひ友佐多く始まひくえ度四年常  
陸太守同六年一品同八年二月四日百官捧宝璽  
鏡叙等於一條宮五日奉迎新帝廿三日即位大

極夏

丙午年

天皇ナ而能好讀經史容止閑雅謙

恭和潤慈仁寬曠親愛九族性又風流む長人事

三代實錄畧文御治世四年而仁和三年八月山崩歿同

九月葬山城國葛野郡後田邑陵

一云小松山陵諸陵

三代實錄續日本後記以下式云田邑々立屋里小松原

三代實錄延喜式枝

柔畧記  
寺所見

### 中納言行平

立山之山乃多

古今集雜別號

一

あらとれゆくといよその山とひつけ山とほり拾葉

式ぬれホリヒトヒヨシヒケヌトトヨ

二

エイソヒラカヒイヘヘちの通名

三

ててこうち勺次よひつけあらとれ因幡の国  
の字よ往て京うちおよ人船とり萬少覺  
かそり別去時さのいねまよもこくらうら  
てあとぬとしきうへいいくしもしもく立波  
さきあうてんへひと人をめくさりそくら

### 古今集卷三

門居郎子内尔雖至痛之者今還金同

才十四相模守

多伎木許流可麻久良夜麻碌許太流伎半麻  
都尋奈我伊波婆古派於追夜安郎  
津  
都尋奈我伊波婆古派於追夜安郎  
津

詞林典故

の因幡の山とよひの和名集と因幡因幡夷部  
稻羽伊豆とを後拾遺集よかやのかずへりよ  
次れよほどもかういふもういふよかうあらの  
ひちと今せてこれそけのゆゑのゆゑのゆゑ  
よ因府のゆゑとこのゆゑとよくやまとよく  
入れとこゆてりゆておとこのゆゑとよく

六月、安東本國の郡小入  
をもと國と名を曰  
國威威臨の事  
古ノ祭列御小能國也  
即ち相も國也  
或いは「相也」也  
或いは「相也」也  
兼て以義法小能せられ  
色と以平治州任の事  
史小入を也

もれいわどみあひ山とふくわくする  
つ式說より西派の権を山うらとて  
とさくとて人をもるかがのまゝその山のいわえ  
いねよとすすと川のそりに因名め記といふ  
葉後是が流化かたよる層を厚見那佐原  
波神とされりうちもとくれとれてよりもりを  
よ強奥から金をめせし時あゆみの長さよりみらのく  
の小田在山尔今有ちとみ五丈より並りみらのく  
山よこひ花後とみるやくもあき山と雪  
ものの山とさくとくとくみだへりはまく  
二代実深也七云齊衛二年春正月壬午從四位下在京朝

臣行ま為因候守とゆれハ化の端より

け亨り仕かう候滿くゆ時四人ふと情て却と仰

さはもあらんのとと/or是迄至る東集

みのが入るもおもねておよびゆんとよろ

ナまかせて京へこゝと時の事とせんす御内事とて

のくせそ頃よがふとひせんとてゆ黒院と

のせ（ゆ）一机のねどとこへるをうれきゆ

伝是へづれき年の八月近六月とくふくに

活院集よあむ竹里もかといふゆ

（くわき）くわきいもほ國へすけき

## ひよしん

おおて君の歌をかみのまへゆぬよひくと  
おひる躬恆集よいがとの守北りもよ  
一日とふるはすふ君の歌を年めよせと  
いそとさん

## 譜

文彈正尹四品阿保親王平城天皇皇子母未詳天長  
三年在原胡匠の性を賜業平の内國史記録等

うちよにぬ天皇御正六位上もう立て陽城

傳末說曰母伊登内親王桓武  
帝女也是ハ聲ノシ業平之傳リ  
ハ故多ニ除ク

天皇之年六十年中納言又仕一宇多天皇寛平  
五年薨ヒナ 元六代より仕そ政源のやあり  
且好学ゆれ流の薦えり

在原業平湖

千磐破神代もきくす立田川韓紅葉水立のくは  
古今集秋下二條丘の東宮の落息にあ  
る時少辰巳よりしおつ流れゆ  
りとひりひりとひきそめよう

まみらまの流てとまくは澄よひ紅まよ也  
えんと伊<sup>い</sup> 徒<sup>ト</sup>あはめがくよよ  
すもりみうの強<sup>カ</sup>かよ流<sup>ム</sup>く<sup>ル</sup>也<sup>シ</sup>  
よりぬもよまく<sup>シ</sup> 章<sup>シ</sup> にゆ<sup>ク</sup> 紅<sup>レ</sup>のし<sup>ム</sup>  
うきてうる<sup>ム</sup>んと紅<sup>レ</sup>のやくことく<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>  
いとゆつ<sup>ト</sup> くわいわゆと纏纏<sup>トト</sup> 纓<sup>ハタハタ</sup>  
いとゆつ<sup>ト</sup> くわいわゆと纏纏<sup>トト</sup> 纓<sup>ハタハタ</sup>  
事<sup>ト</sup>よ速速振神代<sup>ハタハタ</sup> 事<sup>ト</sup>よ速速振神代<sup>ハタハタ</sup>  
よへ青<sup>ト</sup> ゆすと多くひ仰<sup>マサニ</sup>せてもか  
よへ青<sup>ト</sup> ゆすと多くひ仰<sup>マサニ</sup>せてもか  
説<sup>ハナシ</sup>けくまの浦<sup>マダラ</sup>ありあ<sup>ク</sup> そ後<sup>ハシ</sup>とゆきよもか

改  
従傳本脱ハ韓紅トシテ人  
の世トシテ神功皇后之韓  
とテノミシテ後アリシニ傳  
年ニテ神代モニシテノミ  
至年秋有リ行幸のワニハ帝  
中ニテミシテノミテノモト有  
ルムヘリ川口ノ御河トヘト  
ノヨリ所ナカニシテ御上の儀ミ  
トアリ  
革陽固志工蜀  
時灌淵於江中一則鮮明也亦  
誠固益外ニ成都織錦灌於  
江水其文分明勝於初成他水  
灌之不如江水也トソニ後撰集  
紅多行カラシナリ松木川トシ  
治行ヒトトメヤシトスヒトス  
文の如キ

いとゆきつゝくわが身と顛纏よどり  
うきよをとく異てりやうそ、事よ速速振神代  
みえくうううううううううう  
よハ奇一よすと多くひ仰せしもか  
うじんはまくまくうううううううう  
説よけくまく浦よりあくと絞之と仰せしもか

毛顎織々令式うとじんで後をとりてまくと  
てひし縫綿まほ満と今よりおゆうは内へ  
きよめく五人ちむのまのれよみのまよひ  
くもとまの絞り物織る<sup>今</sup>はねを織しきふ  
絞り物うそとひまく在原友子の

時々より立田の川津よりかひよみの水を運  
びましと清よりうといしく下よやく此の水を運びと  
ひもすり綾藻の水をみてはく碎くよやく  
或人をいどりの水をいどりみちとてはく水をみかく  
とらの水の碎き形せすの有こそばくふとタ  
或後より絞るよひすもくもくて  
通す

と紅手を拂と手へまほりの  
右は紅と紅とこゝへと紅も水の深  
きよすううちかとよめんれどいの瀬  
とゆくぬ瀬よかねにせんじの傍と  
いまとくひと瀬よかねの傍やるく  
はれて左あとあらぬるに詫うと人も竹  
のぎとて後のをよみとれくわきよ  
く酒よとてうゑ  
○らむやうれいとこのやく漫の音波の音を  
壊破とするちもやうらやまの上界

いちのいの瞻の義とんじもとよらひ登る  
そて利あこたすに伊登志別王とあさ日紀  
膳武別王とちうみてとくわふとそ半舟のま  
みあそ疾劇のあづはるる氣のあきがく  
見を記すお城は暴横惡神のせまとむれの假よ出と  
あらえと夕一旦神家の傳よまき鳥  
尊くしん要よりりよ時よへまど  
のととひ迷の倍中ひよとひよとひよと  
道ハ遠きのゆとひよとひよとひよと  
15よすきりよ神勇のうりよびく

よかうよかす神とくのとれ尊とやせり  
とくうたのじくわくようとといと紫ハ  
おもちわやうとよすよく一鷹氏の  
波波鹿のきよいちわやうせといつも  
えぢうわよと共ああよまとよく角立ち  
窓よくわびシようひきひひ  
りひまのれりよいまあすなよ支利の  
ゑハ備せれり邊ても約てもよくらわふ  
るよもんらわひともふやかのうのう  
とくくわらわ人氏ちくわる人うもすまつて  
とくくわらわ人氏ちくわる人うもすまつて

冠詩解よみ されり上古の世人に人よけ詞を  
の古語を教ふして有るるよきうれし  
歌ハシカ夜の馬入きとがる左神ハ御人  
よもよま方主と云ふとすよもじけ冠詩解  
ともくくらめ歌う

つやく紅をかく海をかく藍歌よき  
どうあかうどううんれんはれてよき

紅葉のくわ葉を圓うふれは葉の草とふ  
こそもうち藍のこゝのわのゆどぬてね又えよ  
ふく殊よもくしがれハテの江と一村トナキモ  
とよすがりまれもすと云の以よかうて絶多式よ韓  
紅中紅退紅とよはの韓紅 海紅  
のちとせうわうわうわうわうわうわうわう

詩

父行平郷又曰く母伊於門親王也三代実業  
至之十七云元慶四年七月八日辛巳從四  
位上行左近崇権中將兼英派権守在京朝  
臣業平卒業平者故三品阿保親王業後日か治紀詳正  
三品而薨于時被贈一  
品今作昌才立之子西行中納言行平之才也阿保  
者誤字平

親王娶桓武天皇女女上院伊登内親王後日を佐紀

大人又伊

祭内祝をさしけよ登とちるハ至のまと法シロ元又は世  
ハ至スウとのまとこと縫よち本ハ皆つの儀すみ用ひアリ  
又度登社圖とのまもつての若々用ひる傍ありタラニレヨ依テ  
至もつの儀すみ用ひアリ伊登と云ふと即よ少い事あリ  
名ハ乳母の氏と有りテ縫りか泥ヌル事へ吉慶の氏ハ多モ  
不以寺と云ひシトハ生業平天長三年親之上表曰無品  
るやうの況れども之は生業平天長三年親之上表曰無品

高岳親王之男女先停王号賜胡臣姓臣之子息未預改姓  
既為昆比古之子寧異齒列之差於是詔仲平行平守平ホ  
賜姓在原胡臣業平體貌閑麗放縱不拘略無才学善和歌  
案畧無才字と云治うるゝ也ハ貞觀四年三月授後五位上後院云  
署百才字と云はんと云也貞觀四年三月授元位在五年左兵衛佐枚年遷左近衛權正六位上  
多胡臣業平正六位上ヨ尋還右馬刀累加至後四位下元度元年遷

右近衛權中將今年叙位此年相模權守後遷兼夷  
濃權守卒時年五十六或說より平が同母といふ説  
王を娶く業平と生と、主へて、ちの又エ伊登内親王業平胡臣のじとすも虛説のゆゑも伊セ知  
ト猶シテアヘアレハト  
トシテアリツク

若原敏行胡臣

墨のじれをすうて取りそくやまめを爲人めくらん  
古今集卷二 宽永の御内院宮の章

合の章

皇清

寛平へ字は夕天皇の年号しけ后宮昭宣云  
女溫スミ小手コトハ一月に初ヒツ年十月ヒヂ入内寛平  
九年立后延ヒタチ七年六月崩ハシマニテ世平  
七條の后と称せりナメル 枝桑畧記等より有  
柳カツラ新撰万葉集カツラ此后又女温のすを貞親王の  
家カミは女公等カミノコノヨミ等カミノコノヨミを集られりるやとアキラム新撰万葉集  
とソヨモニ解カミノコノヨミと考て御下カミノコノヨミ左の詩  
もそひの内作カミノコノヨミ詩カミノコノヨミヘテ御下カミノコノヨミと  
其序カミノコノヨミは寛平  
五年女公のすねりとくら若カミノコノヨミハ九カミノコノヨミ年カミノコノヨミを  
治カミノコノヨミセラルとくらに立后已前カミノコノヨミのすねりとくら古今  
集カミノコノヨミの後の柳カミノコノヨミ後カミノコノヨミを終カミノコノヨミて

或後叶食之寔五年  
九年有矣行之久而  
不厭之也

嘗てのるより人間のものよりのものと傳はれ  
まゆけらひにてせめて多説ありて是より  
よふわす身の差どよづくとおのをもんこ  
といはるゝからてはれども人多説よし今  
と避ひてと従ふと五ヶ集少壯山町  
次よひとも社めせん差ふくよ人をすと人  
もう候へと相似ておまくい聞ひ度よさ  
へ入らどうかと云ふと今とが一多

アヌス小町

カニシラウミモカヒのサムモドクモホン吉野と

スルトノトウヤ

發勺胸勺ハ席上てうる波と夜と因辟  
ム言えをきぬうちとソレハ御方多氣集  
副兼事の字と同く即ちす前もかの  
シテモナラシケルサセサセ

シテシテハ方多氣集ニ由道シトモシテル  
シテ可トシハ人目と障る事と於

譜

在原胡内大臣中臣錦子一作錦之

天智天皇八年賜友

原氏日本

其男史公けき急續日不記不以等トモ之假名云

且大後既トモ不以等トモ之假名云

之之又の字の別うとことうさうソルソル

天

武天皇十三年賜胡内姓日本紀及

姓氏錄

此史公の男

武智麻呂房前宇合麻呂等ソリ敏行胡内

其武智万呂の男 捷察使富士万呂の子也

右出門督四位まで延喜七年正月とソレ

英治三代實源ヨシマツ仁和二年六月從六位上左兵衛

權佐トモ右近侍トモ侍小轉仕トモかトモ其

後昇進ゆつとくへ多集よこの胡蝶が  
もととちの下よちまも写徳うまもはま

伊勢

絶波は旅よ声の節のろもあきてけせとわれて  
新古へ集めれしゆくは。あ集えとれす  
みづふ声のやのるべとさかく  
のきよ。このよがたるよしよどみこらね  
くまとくよゆうよくわいつせひひくとも

あけよきよとのことのくわやあく  
んと切よ恨しうりくさう。

こ發勺ハリよ毛の筋とひつとくは  
ハムタヤア形をよきさう

みづよ声とひ方多集よ野野じ男  
康の角比東の弓と或ひぬひくもひふ  
しの弓もとひもくもうちもてあいの節  
のるれきよ中よ經よりと役めあう  
さてげすよりもくくくへるとよおう  
百十

こけせぬよりてよりやとく万葉集は死せ  
ふるべ黄糸の毛衣のまゝのま  
と多くうぐいの伝とまゝ人のうぐい  
あうくまきをまねとよやくさ  
れりけせとそとへりく夜余よいゆゑを  
とよう

とてとくやとてのまうせれりと  
せよとよあらう  
こみ葉抄えしきいふくに夜と徳か  
わんのすと暮裏してこれの夜乃

あむとひきり放よとくじり  
せうりとくと放よもくへんの万葉集  
のうれ捨てうせる作と作  
しるよ切うる情と古酒の極よどてふ  
かもうくしりくわらえ

譜

父伊勢守継蔭諸説一回三代実深云仁和二年  
從土位上者至相馬継蔭為伊勢守云  
されりけいと其女のわけ人むぢる

石と絞せとりて召名とせられし物也。今昔物説より  
前原の事。後漢集。亭子院より。うふ湯解のち。

今其物況又  
為原之厚之

ミセマリタシハ行セ

絆せの浦よりへて往あまうれとくみ  
ウツクシモアリヘニシムアリテモ浦ノルトモウ  
父よはみていせよ絆のくじけあ集す大和と  
大和守よはねる時もよき人をりうとき父のほ  
て後孫拾遺集うくよ伊豆の島島と  
ふとくいれに大和わくよせの浦とくさに島島と  
ソシムと置せよ此又伊和文辞よち（和歌）  
曰湯とぞれ、是ての御もゆ

元良親王

（後略）

京に歸りて是より御手元の女 宽平とを以  
て侍奉して雅に親王の御事とまじめし  
がゆゑてよハ密通のすりあはれ多きを以て  
てことあるとよひをかむことよりかくらぬこ  
とゆうべ

既よりうしなひてうちせんそくふねりしよ  
倦くる時すよよかく洗まつてるちへ  
くらゝとれよとあわせよてみゆ  
はよも四十九うじや身わらうよとも  
なりてりんとおひきみとくに窮  
てゑせのれよと相よのまへすアキ

集卷四

改  
志死六基毛國苦奈何入日陀言緒痛告  
將為或人今之日とぬとへと今  
いと、四十九のまへぞびまづ

改  
ひなれをきとくい  
さふれて立木をさまで  
タカヘーもたはるの事  
トハ下ものまとス

四十九のひしきうとるを  
一其の泊はトウモロコシでくね  
○ひき万葉集をわまれもとおしはりさ  
せり初宇良の友伎がまれの友せり初の友  
セリ初とニ  
はれをとどめしと迄もくぬれとめう約  
ひとめしと万葉集を至るのあひう  
うれをとどめておひしとよけくと  
おひしよ経也あることそつて万葉  
集卷四念絶和ぬる物也 古今集古今

ハシビリ小一ゆど。傷のれは、後でこどもへ。  
どうぞ、財人へののがまよ。け等の事と  
ちがふ。世人取とよしわとよしり  
が並びてせんざむよ。そのうえに  
もよぐがまく

今之のまゝをもとめし  
御子の和漢のよけ酒のあさ  
きくわへんとすとよろひのせ  
いとも、のぞみとぞとぞと  
こよめねむる了承集解一

見吉野の山下此地を久るも當也今夜  
毛我獨宿年とのも當也と古川よりと  
あそびの会にてそれより酒  
本殿堂の用もありてあつては  
云氣す。歌ひ只物語とゆきてあまよ  
ふりゆき歌く歌く歌く歌く歌く  
歌く歌く歌く歌く歌く歌く歌く

こみとづくしの綱日ちにゆめどりふう  
近古新式云凡旅役泊頭海中之經標若

萬葉書みやづ  
波の字に漏りあり  
おもとくみとハキ尾  
つハ助字べくハキ尾  
タクルハはのまと清  
くの字と漏り一と  
是音便よこそ子之

有田標朽折者搜求後去先水肺の所  
あとて重く入船よ水の深ゆきよりしき水  
肺之穂の筋筋入へ方坐集よ遠津  
淡海引佐細ほとよみあれと班波津太  
寧府カリて化生ばよ多れいは  
あれとらよううそとあとことて  
もとんじうそろはくてもい即  
ほうすとくと鶴のくま似  
あく

譜

紀王、陽成てよしよ日本記畧よ大慶六年七  
月廿六日壬寅三品兵部少輔良親王薨と  
ゆ西宮お裏古よ延喜七八年の以三品  
兵部少輔と云く松遺集大和わ諸寺よも兵  
部少輔と云くさて今仰本の三代実源を當  
ナニよ元慶七年七月從四位下元良敦主  
授從四位上大輔あるを清う右官の小  
之位良東王とさう是正ちうけ年  
陽成てよナニ歳よもせり叙位をき

月のをよしもとす日和主の歳品とも  
へきと送四位とさるも此は是にてまち  
並みつゝ亦はよたのまとリされへ清て  
ちの吟味とくふととアラウムと  
るの

まねばは附  
今之と比し4月の三月とほおつる

古今集焉四凱へりと  
されは其日のメつあすとや坐うけん今  
のるよあらんと人ハもう解くいひりの  
物よいづくよも月のもよむとゆふト  
しげくよりあくと在めの月とゆ  
てしきと歎きつるくおほの まくと  
までの月とくと水とよもとれぢぢ  
よもぢうとそり

古今之んと今のるよあらんとくら後撰  
集う今之んとそもくとくらと余まで又

えよへアツアーンヒーれう  
こくくハ車と船と二つのあひけふと  
トヨリシテトトコトを令すて又引キテ  
のクムトムトモトと呼ぶる事のれ  
て年のくく又晚くもとよわへうせ  
ねくうくはのいとくらへうがなあ  
タクスルねしてとよれりのくく  
タクスルときよきのとよりとよせ  
ソクシモトトクムトムトムトムト  
ミムの月と月と月とゆうて夜の明る  
とソヘキと夜と下の月とよしが  
トソヘキと夜と下の月とよしが

ハサウエのセラフ一ノイの傳  
アーヴ集

七月の在の月はもはや  
まわらや

○承昭左今秘江よ七月の夜れ長よも月の  
月のむすそ人どもとよくとよく  
理よもよとて害れ害れ或說よも月の月と  
約かる一夜のあよりすよみやて月日  
を送りぬよ秋入も月のえよせりと  
とくのまひうる古今集の教ふとぞ

編集するやうなひの説を大集とく  
今まさらゆうり年月と経て約定の事  
立候方なり

も右に述むる事よりはるる事を記す  
个えどもてはし胡うらひ下の言との如  
本者といふわら日アトの略傳此もあつ  
今ハと続ケル也さうふの衣よりもとすし  
今シとやねもとて廻る事より候  
月老といふ人よりはるやくアト又もと改め  
桂木小秋田刈毛石井山口れの者も

己上其夜より下しては「因第四」

さ遠よ近がりき今更りやあとゆんじらの  
ゑゑんふやんのこよめまはれ様もとせ  
今シといふ一月も月の三月也月とゆか  
月和アキナリと今昔とやまみゆくとゆ  
君こすりゆてアキニテとゆひよおひかくも  
あ離のりくわの小萩あきゆれとゆとぞと  
己上うち一秉のとどて却て感ゆまく  
ほもとゆひとみの河うしきすい即付の事  
云だり

諸

枝桑畧記云寛永八年閏正月七日子日寫於  
北野雲林院之遍招僧正在俗時す弘迎素  
性は原施度者各二人大和物院と遍招の事  
シソよこすよひま次ぐうりの内のよともきり  
立ち即左近將監とりて左上してヨリ仰  
かくせよいますがうとすゆきよとておもやう  
うちれいは仰のみは仰。えとときとそ  
えしひ仰みやうてりう又枝桑畧記云

昌泰元年十月廿一日太上天皇有御駕狩云  
云直指官灑上皇臨發上皇勅曰素性法師  
應住良因院<sub>石上</sub>馳使令<sub>海</sub>法師卓騎  
參路从<sub>三</sub>上皇感歎禪師晚笠揚鞭前駕  
行勅曰相隨者惣是白衣禪師<sub>称</sub>須以假俗法  
仍号曰良因朝臣<sub>取</sub>住所之名日暮宿大和國  
多市郡右大將山左也勅曰良禪師者和歌  
之名士也宜為首唱以慰旅懷即進和詩以  
せりういぬもし名をアヒルん西文抄裏  
ちよも内に立て沙辱れとか下へんよと

まわらえもする

文屋 康秀

吹きらゝ秋のまよれりとされし山川とあゝとそ  
古今集秋下是真親王乃おれむ公の可  
秋のあよあゝの吹てへ必よほのとどれそ、  
ふくゆれり山川のうど麗とソラをある  
さようううううううう

け可新撰万葉集小ハ天皇

サ次丹秋のまよえ芝折れ者郁み山川緒荒芝  
成監とあら成はるふの流は傳る古今古付よハ牙二のう  
やめてまよえのとあら古今集序により野  
きのまよえとあら古今樹々秋のあゝよお  
とせんよ野々とのせんよ偏うらかく  
さうなよ古今集よ秋のまよえとせんよ  
美とと實之自第の古今集の秋れ一モセ我  
な村田生道、人せらうへよいうじよの  
みこれづのうあくちせようせんあかじやの

あさやくすりよあまのきよのうどり生  
しへ山をもあらへてすじひやむれり西  
タヌーいよとまはりへとくとおる御ま  
ちゆうあらあらんとあるも古  
かの御とわ方と下きこけ下のすむ御まは  
もともくけはふも御康とくとく  
うりうらも海へ下よあくへ  
ともとくとくの人の人とくされときて也  
くみもくもののかえきてくれりそのま  
うりうらもくらたの新様万葉集よ芝折

と云わの候はり正葉 万葉集を十八枚花高尙之手れ此  
とちう古事記より八坂折之紺刀或ハハ之手利ハ内と者  
ハ坂廻被れる所のすがり而以テ萬葉の言と歴め  
昆蟲信謀の謀と法屬故で相りふゆれりう  
なしきもとくひまほのせんじとあこゆうのと  
えりに當りをきれ後までハ切詔に 斧木の御詔  
と坂垂とよ船とひのゆのゆ下て別業う  
。じへ万葉集の古事記と信鳥未だとぞ諸宣本  
のまへまよとあらじゆもくよまうゆま  
郭挽万葉集よしう 郁るとお在り

うるせうく 美少人もひへとゆり

和

ちわよ 郁子 一翁の棣

和名年閑  
今柳郁宣

作郁 とあるはとや 郡方の

山の

じくとこにはるゝとや 和名の 午まの万  
系集は字の字を説て午と云ふとす  
もりれり是も字と説するとも  
よへられと右郭万字の何よ  
じく けは通音をひへとひから  
んこそ見る弘に二下むく河の花よう  
てちよとよよととされえりれりう

うりとも物馬免原寺の類 わきわはう字役民と  
ちぢみ集のねれちようとがくしてあひくやねとひ  
あれへ共にまで一日うちたの旅のすようとて生く  
くすくすくしゆの旅をとどきを起らてくくうく  
のむよ叶とふるうにようとくわらうするとい  
はくすくしおもよとととつくとくとくとくとく  
もあゆねまくとくおとくかくつめとるまくとく  
ちますさき人のまくとくとくとくとくとくとく  
こちくいわきわよ山の山下を風也 和名阿  
こ こ山の山下をとくとくとくとくとくとくとく  
うかく方坐集は御う畠をせむ下の山河  
とも山下とのとくとくとくとくとくとくとく  
トも山下とのとくとくとくとくとくとくとく  
トも山下とのとくとくとくとくとくとくとく  
のとくとくとくとくとくとくとくとくとく

そてのち内うちされとられ、この日  
とあるのいげすよよへられまで、此て  
山かとあらとふよきりあよまほの  
もとくねは荒まとよちのえとよのと  
場所に石をよ見とれるにけりよもうと  
之へるふよもれとちとあらと川へよみ  
せりとくらとわんしれれれれれれれ  
のとくらじふふもじくねれれれれれ  
入るよもととととととととととと  
うむうむう

譜

文庵真人姓氏深又天武て定室よニ  
品長親王之治也と云う。今の印本こそが王と  
いはれ左大臣として深又して處せられ康秀のね  
く先祖不見草集をよ二條居とも春宮  
の高島ふとや付もうりりきよ、からう  
もとくらう二條居の貞觀八年十一月ち女  
清えよえと年立居られひの宮とよじ  
貞觀十五年端承帝十一年をよえと元年

以あひのちれむやうり先身紀五に和天皇  
オニのまよやうちもか合のひへ七八十年  
よしめのべ一月上賀茂序と考へるは寛永  
十三年正月とあり。店あるを合のうと携わらずと  
申す。店は元年店あるを合のうと携わらずと  
申すとけり。入へら着け次のみ胡麻と  
豆すらあはゆるが是も胡麻うるをせられ  
まゐとや胡麻そくへり。考へらうとあ  
まひとよへるよゆるうだくちかのたは  
のをとともあはとされ。二そくより胡麻  
ちづり一丸と至り。後まことにわのまき

まくも不じやのあきやまととれられ  
端あもきとこと

大にナ里

月さればらよわきやうれきうきの秋より  
古今集秋上是夏秋とのあひのう合のう  
一をあつてとり天下降れ。秋うるは月よしく  
ひさめひしつのうよりが。まくも  
まくもとこ月とぞいとかかへしよ

の多いつ

此や夢もと事  
とゆきとあうと  
かゆふ晴勝の月と  
あらゆくとまうれ  
きハ有るを

こえよ諒をわたり、中うちこう  
こそよふ下ヌあくうり或說より古為、  
秋無沙ヌ秋牛只る一人、長とよと川さ  
そうち大い氏、儒者としよモ其白氏、  
文政嘗せられけりゆきとつる能む色  
万々集日歌よ

あらゆ事秋ノリ、ちゆくゆ出のちうけへ  
之をれしき

こちの一本の利きれのねよと云詩

と源又道てらす、つてゆく二つ  
じそらうそらのれう、佐々千と書ひ  
左角又とくろ大和英所守の公也のすは三子と想と  
しもくわうううううのそくとくみの後日記のる  
候と事なるのあよそいか萬利止道のれふあ然とある  
譜

大に胡近ハ後日本紀天應元年かん云々江  
久迄立位下ヒ師之翁祐道も寺二十力人  
言ヒ師之先出天德日余十四世孫野見翁  
祐道、望請因居地名改ヒ順以高菱原姓  
勅依請許之テ、延喜九年十二月勅外從

立位下菅原宿祢道長秋篠宿祢安人等並  
賜姓胡氏又正六位上人師宿祢諸人等賜大  
枝胡氏其士師氏總有四腰中官母家者桓武  
父是毛受腰也故毛受腰者賜大枝胡氏外祖  
按諸大枝陵山城國乙訓郡とあいにそも在也  
毛受腰者是多ハ地名也アリハタガラシ自餘三腰者是  
從秋篠胡氏或屬若原胡氏矣云々

さくさく大枝胡はを音人ひやうひ  
てこゑーとて大いと乃ふ  
こ千里のいわ拾枝柳云參譯音人男共歌

菅家

けつひぬまとうりと山室は御代は  
古今集釋族朱雀院を以てかくせ  
りと山と山とよしゆる。

この朱雀院、定まるとやうに け院 家  
侍従の重き け院より け院 家  
累代の後院を け院より け院 家  
御代の名めやへ冷泉院以下の御邊の例々  
ありひまよをくへ け院 家  
こうふむりまくとくへ け院 家  
うせふとよくとくへ け院 家

とかくとよくとくへ け院 家  
みゆ山のすゑ集坐こよ長毛王駐馬寧

樂山修教

佐保通の寧玉の平祭尔置幣者妹子  
日不難相見染跡衣このすそを以てよもる  
とふふひとかられとく万紫集坐す  
相坂山ともいふの山とよ名めらしくあれ  
ハ良の恐乃付うねらねろ上まで猿々人  
ときう旦猿くれ人をよくわざとあ  
てやをげの頂上と即ち向の山ともど

自ゆよけ神もありてることよハゆるんと因

集モカヌ

加思故美等能良安里志辛義故思  
治無多氣尔多知伊毛我各族里都

うちを今モそぞ切りよいはこよも猪り  
のへあく山の上野とまて、よりしてつ  
ほれきのこうをわざてるるにまし  
てことよそぞふとよがく、ト佐よ  
山のとくとふげゆの吉後うる下  
笑時もさうすと本院よソウカラハの體

推の後

けゆまハ昌泰元年十月宮の御ゆまの  
次て、桜はむね去演へも院せきそ  
へてひびくのゆびくあはは原  
ゆまにゆくの神ときくよとほ  
もげなよくけらぬと伝ふのとり日記花署  
枝桑墨記等よろく主は伝ふのるは先よ  
／＼あせう

つけひい院の扈從船の私のゆきえ  
う異せず即此山の紅葉の説ひよきゆき

改  
タニ切とまゆびとつくら  
ああああああああああああ  
第ハ御のぬきを教と教  
叶能ととととととととと  
そねえ君の所傳を論じて  
て初の種とよとよとよと  
年とおとゆめとおとおと  
あふ幸いとおとおとおと  
すとされと早と早と早と  
そとそとととととととと  
ハ神の御とおとおとおと  
まうまうまうまうまうま  
くとくとくとくとくとく  
勢と勢と勢と勢と勢と  
やうやうやうやうやうやう  
名小ソレソレソレソレ

代うち直美作のとよとおれまくらのやまと  
らむるはうらゆきもこうあくともう」とい  
ふ人むかわとは「ゆきのきもこうあくともう」とい  
ふことじてさてそのあらはるのゆき  
とよとおれまくら後撰集は後山遍照  
がうれはゆきえしきみてねくみよみ  
小花より後ナ前集秋下葉之  
紅葉をも花をもわせると「ゆきのゆき  
がうれはゆきえしきみてねくみよみ

猿うらまく生て今れんまで牛ほき  
とひてけりるよ  
まわせけりへつ年月のよりあてぬ  
かくさん  
ぬきしらちととぬきし面々不様う  
併よろひせぬとふす甲 万葉文不様  
ぬきいへふ色の結布とくわく  
うなよ万葉集とくわく様のうくと  
ぬきしらち中世う様ひよこま  
をぬきうとくらう中世う様ひよこま  
小うして夜よ入てゆくとくろくま

くよぢらば、ひぬて行こゝもうち家  
みぬの神ハ利名村云道祖也俗通云芸  
工氏之子好造社故其死後以為祖ハ利名佐信  
又云道神唐頼曰福音觴ハ利名太無ハ道上祭アリタシ  
云造神也又云之集ハ利名加義アリタシ道上祭アリタシ  
神ハ是ハたゞハに日出化等ハいこかほの  
尊ハ茅ハれりすハいてやうらハ神ハ道ハの  
ちハの神ハひ乃ハ神ハとハうひハなむ  
神ハとハまの神ハとハふそハのハわすハす  
されハ古今集ハ下卷ハの第ハ六也ハとハはる

そぞららまとの神ハわすね深ハれハ事  
裳ハの神ハとハソハや或ハかのハ内ハ神ハとハまハう  
ひハて形ハまハ神ハとハくれハの神ハとハまハう  
の神ハとハの神ハとハ即ハ旅ハぬハみゆハとハるハけ  
神ハうたのハ名ハあハうハふハ異ハ圓ハのハとハるハけ  
せハ日ハのハ神ハ名ハよハつハきてハ引ハ射ハ  
こハまハくハそハわハのハとハ小ハとハソハ望ハてハ若  
系ハ集ハよ池ハのハ一ハまハとハ用ハ又ハ陸ハ乞ハせハち  
ひハりてハあハがハきハのハきハふハとハふハねハもハめハりハとハまハく  
のハ小ハとハきハのハもハうハとハあハふハ也ハ山ハのハまハく水ハまハく  
くハれハとハよハもハくハうハきハ

譜

菅原胡氏ハ大枝胡氏と其子と曰くと云  
又曰父參議從三位是善々カニ也男也菅原贈  
大政大臣ムツジン真貞觀十二年對策及オウシテ文  
帝侍讀昌泰二年右大臣ヨウジン六年正月十九日  
日為太寧権師坐事也ヒナニ延長三年二月二十  
五日丙申從三位太寧権師菅原胡氏薨於  
西府ヒナニ九月三日三代實源日下記畠枝  
桑畠記等畠文ヒナニ小芳家と云々してハ荒  
涼のよきとすひを祖天神二人のひる

時と崇て中とも凡の仰み達ひてちう  
やいはるる所ヒナニ次第により小芳家を改大  
臣とせむ行へるヒナニ正慶二年二月左房左大臣夢観  
又古今集ヒナニ菅原胡氏ヒナニとせむるもしあ  
於よりぬる是ハ勅撰ヒナニ御前ヒナニ其とよ制  
セシムトモいひて権者の私ヒナニおへりね  
今トモとうち按役桑畠記云延長三年四  
月廿日前右大臣菅原胡氏詔賜本職兼増一  
階昌泰四年二月廿日宣余令焼却之勅號  
大富天神一日延長元年閏四月十一日賜左大

に位す、延喜三年奉職にウトタラモ同  
五年の撰は右大臣と、くへきひ勅許ア  
ムとソドもいま、ヤシテアキ、ヒシメテゼと  
リぬクツリモス、これハ大臣の書はすり  
さけ大納言の書法も、いよまでそのうゑ  
極はちや一ノアトニ式令の法ヲトヘテ、  
ハ左大臣友原胡白大納言源胡白殿と  
シモソシムと、あひのゆひも、ヒシメテ  
モ此れの書も、ハシメテゼ

之傳太大臣

名から相生のあつて今うしてらうれ  
後撰集もとんこのりとほくらうる  
すのとひれてわざひらてもよ人よも  
いしてゆき来るうしもねとうう  
○後撰集は名とからくもくも  
相生のりよまうのさ寝りつづく  
とよ絶えじゆれりく其名よ事よと  
見てあらへとこちよ洗せぬうさねう

ハ寝とひうりてこりしのきとふの  
ハ寝の

さねうへテ名秘云立味佐祐加立良は肉甘酸  
核中辛苦都有鹹味故名立味之とを立人  
金子は船即子と害也んとをもつめ立川  
の渡の船よ以蓑椅いわよ佐那葛の根と脊と  
其計の滑らうがくわとゆうも蓑椅と大山  
ち余の端へもすきゆくく渡ることあり  
今しけほすと橋りつをゆめりよかうう

けあり里家室の殊比とくるをまくはるを  
よもよも高ともちるぬとたのやまよまよ  
へもと又桑葉桑葉も夏桑或ハ桑葉花都良とりを  
トよが良の花と云ふと訓一されと生のまきつて  
而況よまむ事

音よのくわいのきのさねうへとむとむと  
はくわいとよおよもくとけううもしむと  
ううううううううううううう  
れとふくことうへくわくは標集立よ女  
の毛と小海うあよよもやくううねとの

どひれ  
つせも歎むかひのあつてうそども  
ようちりうしもあるとよひもせくろつけ  
くまくわあれいあは集のうめつも  
へらゆくもあらんとせんを安づくふ  
ト勺の例、万葉集也とすむ  
遠近磯中、在白玉人不知見依鴨

譜

内大臣高友公オニ 三條右大臣ミツジヤウジン 定タヂ



延長二年正月大納言より任右大臣義平  
二年八月薨

日本記各技采略記等

